

日本国内でも活躍する修了生



大原 育子〔修了生〕

看護師

私は救急安心電話相談の実践現場から、日々の疑問をテーマに入学しました。社会は目覚ましくAIが進歩していますが、対人による情報提供の需要は高く、人々の多様な生き方や社会的問題を背景に正解がないことを痛感します。今まで看護学の視点で世の中を見てきましたが、様々な分野のテキスト科目から学びを深め、研究と実践との行き来の中で、人々の抱える問題への向き合い方に深みが増しました。院生仲間との対話にコミュニケーション能力を鍛えられ、正解ではなく成解に行き着くプロセスが、何よりも自分自身の貴重な開発になったと振り返ります。社会もまた求めているのは支援なのか、もしかすると気づきに出会いたいのではないかと、卒業した今も尽きない探究心と人となつながら面白さを残してくれた本研究科に感謝しています。



岩塚 善哉〔修了生〕

小学校教諭

現在、小学校において、通級指導教室担当として勤務し、通常学級の困り感がある児童の支援をしています。また、特別支援教育コーディネーターも務め、校内外における連絡調整や保護者との関係調整をしています。修士課程は、JICA 青年海外協力隊と同時並行で2年間履修しました。協力隊はナミビアへ配属され、事例をもとに改善点を見いだしていく「事例検討会」をナミビアで実施し、修士論文は、事例検討が教員の指導方法に及ぼす影響についてまとめました。現在の勤務先において、研究した事例検討を応用することがあり、様々な視点や角度から、物事を考えることができるようになりました。そして、学生同士でSNSや大学院の掲示板で進捗状況を確認し意見を交換したことで、それまで関わることのなかった人とのつながりもでき、海外にいながら学べたことは、大変有意義なものとなりました。



高野 勝郎〔修了生〕

国際協力機構 ガバナンス・平和構築部

JICA 海外協力隊(環境教育)としてフィジー共和国で活動したことをきっかけに、同国の先住民とインド系移民の対立・多文化共生に関心を持ちました。論文執筆過程では、漠然とした疑問レベルだった初発の問いを磨き上げてリサーチクエスチョンを設定し、それを明らかにするための論理的なストラクチャーを組み上げていきます。私は昨年度まで JICA 国内センターにおいて研修員受入れ事業や国内における多文化共生事業を担当していましたが(2025年度本部へ異動)、プロジェクトや企画を立ち上げる時に、どのように問いを立ててスコープを定めるか、それに対してどのようにアプローチし、まとめ上げていくかなど、修士課程で学んだ思考方法が大いに役立っていると感じています。本研究科において、研究内容はもとより、先行研究の読み方、論理的な思考プロセス・文章力など、社会開発に携わる人間として重要な力を得られたと思っています。



和田 さとみ〔修了生〕

岐阜県公立高校教員

2015 年、当時勤務していた公立高校でフィリピンにルーツをもつダイレクト生(渡日後、日本の中学校を経ず、直接高校を受験する生徒)を担当したことが外国につながる生徒に関心を寄せるきっかけとなり、その後 JICA 海外協力隊員として、スリランカで環境教育活動に従事しました。本研究科では、多様な分野で活動する同期や個性豊かな先生方から刺激を受ける中で、自分自身の「思い込み」に気づき、物事を多面的に捉える力を養うことができました。現在は、外国につながる生徒が全校生徒のうち 62%、11 カ国にルーツをもつ生徒が在籍する岐阜県内の公立高校で校内外の業務調整及び、高校生のための日本語指導の在り方を大学等専門機関と共に研究実践しながら日本語教育に従事していますが、現在の仕事にも、本研究科で身につけた開発学の知識や視点が大いに生きています。



渡部 晃三〔修了生〕

国際教養大学 URA・教員

修士課程在学中、「先行研究から学ぶ」、「複数の視点で客観的に対象を見る」、「研究の問いを磨く」ことの研究における重要性や論文作成の基礎を丁寧に指導いただきました。先生方や在学生とのテキスト科目やスクーリングでの意見交換から新しい視点が得られ、それは前職でブータンやケニアなどの国際協力の現場で応用することができました。現在は、活動場所が日本の大学に移り、所属先の大学が複数の大学と連携して進める森林の価値の変換を通じた自律した豊かさの拠点形成をテーマとする研究事業に関わっています。大学院で気付かされた、「開発に関わる問題は外国だけでなく日本にもあり、開発の視点でこれからの日本の社会のあり方を考える大切さ」について、日本をフィールドとして取組みたいと思っています。



大橋 充人〔修了生〕

愛知県職員

愛知県庁で様々な仕事に従事する中、多文化共生の仕事に携わることになり、日本で暮らすムスリムのことを知りました。大学時代にアラビア語を勉強したこともあり、彼らに強い関心を抱いたのですが、仕事として深く知ることは難しいだろうと思っていました。そのうちに、ひょんなことから、本研究科のことを知り、ここで彼らのことを研究しようと思いつきました。最初は、国際開発の経験がなく、不安でしたが、これまで取り組んできた仕事は、愛知県をフィールドとした社会開発なのだ気づき、改めて、これまでの仕事を開発の視点から振り返ることができました。また、それ以外にも多くの知識を得、ものの見方を学ぶことができました。偶然入った本研究科ですが、現場目線で実践的な考え方が重視されることが肌に合い、同期の人たちとも気が合って、充実した2年間を送らせていただき、感謝しています。

※掲載者の所属などは、2025 年 6 月現在のものです。

在籍者情報・グラフ(2025 年 4 月現在)

